

## 26 科学者の卵を育てる――「若い科学の芽」を伸ばすこと――

昭和 55 年 4 月、県教育委員会学校教育課勤務を命じられてまもなく、私は植田課長輔佐につれられて、当時は県庁 2 階にあった文化記者クラブを訪ねた。ここでお会いしたのが読売新聞社奈良支局記者の柳林修氏である。それが、日本学生科学賞奈良県審査の担当としてのスタートであった。そして、これまで、生徒と共に審査を受ける側であった私は以後の 8 年間、柳林修氏と共にこの事業の企画と実施にたずさわることになる。

奈良県教育委員会と奈良県科学教育振興委員会、読売新聞社の共催で行ってきたこの事業は、すでに長い歴史をもっているとはいうものの、それでも何か 1 つのことをやるとなると担当者としてはいろいろな作業がある。実施計画の策定、作品審査の計画、審査員の委嘱、関係機関・団体の共催や後援依頼、週報掲載による周知などのほか、限られた予算の中で子どもたちに喜んでもらえるようなトロフィーを準備するといった仕事である。こうしたことに熱意をもって取り組んでくださったのが前述の柳林修さんであった。

夏休みが終わると、学校や地区の審査を経た作品が、県内の多くの小・中学校の子どもたちの作品が寄せられる。それらは、  
「どうしたらこんな素晴らしい発想が浮かぶのだろう」  
「このような真剣な取り組みをさせたエネルギーは何だろう」  
と思わされるものである。毎年のようにそうした作品を持ち出してくる子どもに聞くと、  
「学校や地区で開かれる科学作品展を見に行く日、それが来年の研究のスタートなんです」  
という答えが返ってくる。

「このような作品が埋もれてしまうのは残念だ。保存し、同様の課題をもつ子どもたちのヒントになるようなものをつくりたい」

と、これらの作品を網羅した冊子づくりを進めておられたのが私の前任者である植田正家先生であった。先生は、このことに深い理解をいただいた奈良セントラルライオンズクラブや発明協会奈良県支部の援助を受け、「若い科学の芽」という冊子を刊行し、県内の小・中・高等学校等に配付する仕事を進めておられた。私も、それを受け継いで編集を担当したが、いつまでも善意のスポンサーに頼る事業には限界があり、中断せざるを得なくなったのは残念なことであった。

この科学者の卵を生み出した事業のもう1つの成果に、小・中・高等学校・大学の理科教育関係者の交流があった。作品審査で同じグループになった者同志が、作

品について語り合い、自らの理科教育論をぶち、校種を越えての交流が生まれ、互いを深く理解できるようになっていった。このことによって、子どもたちが学んできたことの上に学習を積み重ね、さらに、その先を見据えた授業を展開できるようになったのである。



この「若い科学の芽」に掲載されたものには、もう1つ奈良県児童生徒の発明工夫展で受賞した優秀な作品がある。この発明工夫展は、奈良県教育委員会と発明協会奈良県支部の共催になるもので、これもまた長い歴史をもっていた。私が事務を担当した最終年度の昭和63年に行われたのが第44回であったから、今では半世紀以上の歴史をもつ事業ということになる。この発明工夫展のほうも、受賞作品の展示会を開くと共に、これらをスライドにして各学校に貸し出していたから、これをヒントに新しい発想を加え、一層優れたものが生み出されていたようである。

こうした2つの事業は、奈良県教育委員会が示した「学校教育の目標」にある「自ら考える力を養い、創造的な知性と技能を育てる」を具現するものであり、奈良県における小・中・高等学校の児童生徒の創造性を高める上で大きな成果があったように思う。しかし、当初は、これらの2つのイベントに取り組む子どもたちの数は増加傾向を示し質的な向上は見られていたが、次第に高等学校の生徒が欠けていった。学習内容が過密になり、答えだけを追い求めることに汲々とし、途中の過程はともかく答えだけが得られればよい、そして、それさえ覚えておけば合格すると考えてのことであったとすればさびしい限りである。

「若い科学の芽」の第3号には「若い科学の芽を育てるにはどうすればよいか――科学研究を中心にして――」を、第4号には「子どもたちの想像の芽を伸ばすにはどうすればよいか――発明工夫展の作品を中心にして――」をテーマにした座談会の記録が掲載されている。ここでは、奈良教育大学名誉教授の岡崎良吉先生、小・中・高等学校や大学の先生、発明協会の常務理事、県教育委員会学校教育課指導主事から現状分析や課題が提示され、それに対する解決の方途が述べら

れている。あれから 20 年近くが経過した。しかし、数々の指摘は当を得たものであり、その提言は今なお新鮮なものである。改めて先人に学びたいと思う。